



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聖地巡礼のプロセスと真正性 : サンティアゴ巡礼と四国遍路の事例を中心に
Author(s)	岡本, 亮輔
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 145-161
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73756
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS12_13.pdf



聖地巡礼のプロセスと真正性

～サンティアゴ巡礼と四国遍路の事例を中心に～

岡本 亮輔

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

サンティアゴ巡礼は、真東から真西に向かって歩いて行くので、太陽が沈む方向に行けばだいたい着くので誰でも着ける。ガイドブックとかも一切いらないというそういう巡礼になっています。こういう古い建物がたくさん残っているというのが、フランス人の道の特徴です。どういうことかということ、スペインの南北問題というのがあって、そこを東西に横切っている道がこのカーミノ・フランセスというサンティアゴ一番の道になります。我々が行くと美しい風景だなと思うのですが、それはでも、はっきり言えば、経済発展から取り残された人たちの地域で自然と昔から残ってしまった道をドイツ、アメリカ、フランスから来たよりお金持ちなヨーロッパの人がなんか美しいものとして発見するという形になっています。ところどころかなり大きな文化財とかもあって、これはブルゴス大聖堂とかもあつたりします。基本的にはこういう道を歩いて行く形になります。

一応、2015 年の国籍別の巡礼者をあげますと、イタリア、ドイツ、アメリカ、ポルトガルなどが多いですね。昨年度、2017 年度は年間 30 万人の人たちが歩いたらしいです。日本はだいたい 1000 人くらいと言われています。その巡礼者数の推移というのがポイントなんですけど、これは私が作成したのですが、より新しいのを持って来ました。2013 年が 30 万人を超えたくらい。ポイントとしては、90 年代終わりまでは 5 万人くらい。ちなみに、サンティアゴに歩いて行かないで直接飛行機で行く人たちの数は 600 万人～800 万人と言われています。なので、巡礼する人は圧倒的に少数派なんですけど、それでもほとんどいなかった。これは 2000 年代に入ってもまだ 10 万人に届いていない。今のようにサンティアゴ巡礼という人がたくさん歩いているというのは、本当に最近の現象で、ここ 10 年経っていない。数年くらいの状態が、昔から続いているかのように語られているとご理解いただければと思います。

ところどころ突然、突出しているのは、これはヤコブの聖年といわれているもので、一応、聖ヤコブを奉ってあるのですが、彼の正式の日というのが 7 月 25 日です。この 25 日が日曜日にあたる年が聖なる年になってよりありがたいというがあるので、その年だけ、確か 5 年、6 年、10 年、11 年の周期で回ってくるのですが、そこだけ突出はしているのですが、急増しているというのがとりあえずは、押さえられると思います。

そうすると一体、何故、こんなに人が増えているのかといたら、基本的にはメディアの影響があつたといっているかと思います。要するに、カトリックではない色んな人たちが

がサンティアゴ巡礼をしていろんな本を書いている。一番最初に出たのは87年、ブラジルの元テレビディレクターで途中から、いわゆるニューエイジとかスピリチュアルとかに凝りだしていろんな本を書いている、パブロ・コエーリョ。世界的なベストセラー作家ですが、彼自身がこの巡礼をした。80年代くらいにまだ誰も歩いていないときに巡礼をして、その体験記みたいな本を出す。カトリックとはぜんぜん関係なく所々で謎の体操をしたりして。非常に退屈な本なんです、これが非常に読まれるようになって人が増える。ちなみに、訳者は山川夫妻。今、我々がなんとなくスピリチュアルとか言っているのは、この二人が仕掛けたものだという風に言っていると思います。

もう一つ影響力が大きかったのは、女優のシャーリー・マクレーン。ハリウッド女優ですが、彼女は最初、普通に女優をやっていたのですが、「アウト・オン・ア・リム」という画期的な本だったのですが、ここでニューエイジャーだということをカミングアウトした。その後に、彼女自身も巡礼体験記である「カミーノ」という2000年に出て、やはり英語で書かれた物なのでこれが圧倒的に読まれて、これによって世界的にサンティアゴ巡礼に行く人が増える。はっきり言って、マクレーンの本以後、マクレーンによって流行っているといっていると思います。

さらにドイツですと、2004～05年だったと思いますが、ハーペイ・カーケリング、コメディアンらしいです。ドイツでまだ37歳くらいでテレビタレントとしては一番売れていた位の人が、突然、仕事を1年間休んで巡礼の旅に出た。「巡礼コメディ旅日記」、巡礼の主旨をこうやって出版して、ぜんぜんコメディじゃなくて面白くないんですけど。これがすごい売れるんですね。ドイツで300万部売れたらしい。これによりドイツ人巡礼者が一気に増える。さらに昨日お話が出ていましたが、映画の影響というのは大きくて、2本あって、1本フランス映画2005年の「サン・ジャックへの道」。サン・ジャックとは聖ヤコブをフランス語で呼ぶときの名前ですが、この映画の話もカトリックは関係なくて、話としては、彼と彼と彼女というめっちゃくちゃ仲の悪い三兄弟がいて、この三兄弟が親の遺産相続をするにはサンチャゴまで巡礼ができれば相続できるというので、イヤイヤ旅に出るという話です。

そこで知り合うのはフランスのイスラム教徒の少年2人。卒業旅行として行く女子高生2人。要するに伝統的なカトリック信仰を持っている人なんて一人も出てこないという現在のフランス社会を非常に反映した映画になっています。もう1個は「星の旅人たち」という2010年に出た映画で、マーティン・シーン、「地獄の黙示録」とかで有名な俳優さんとエミリオ・エステベス監督というのがマーティン・シーンの実の子どもです。マーティン・シーンの本名はラモン・エステレスという名前です。要するにお父さんがスペイン人。これもマーティン・シーンがどう巡礼するかといたら、実の息子が大学院というところでもない意味のないところに行ってしまった。しかもそれを途中でリタイアして自分探しの旅に出るというわけのわからないことを言い出した。お父さん、お金持ちの歯医者さんの役なんですね。息子がちょっとおつちよこちよいで、この後紹介するピレネー山脈で一番最初の

ところで遭難して死んでしまう。その遺体を引き取りに行って、息子の僧衣を身につけて代わりに自分が巡礼をすると。なんで巡礼なんて馬鹿なことをするんだということを迫体験するというそういう映画になっていて、これはあまりそんなに面白くない映画なんです、誰も信じている人は一人もいないんですが、それでも歩いている人がたくさんいるという、そういうことを捉えているという点では非常に面白い映画だと思います。ということで、非常に簡単にここまでのまとめは、サンティアゴ巡礼が何で流行っているのかといったら、各国でいろんなメディアによる表象がたくさんありました。そういうお話として理解していいと思います。

スペイン側の巡礼路は93年に世界文化遺産に登録されているのですが、ヨーロッパでは世界遺産というのはほとんど価値がないのでそんなのは一般の人は全く知らない。世界遺産になったから人が行くということはほぼない。なので、この辺のメディアによる影響があるという風に考えていいかと思います。

やはり歩くこと自体が目的化しているという下休場先生の問題提起でいうと、一番ですね。歩くことの魅力とか意味、あるいは小林英俊先生のその後にある社会変化とか自己達成感、歩くことが人を変える、新しい信仰みたいなものがこういうメディア作品を通じて醸成されてきたのだという、そういう理解でいいのかなと思います。

最近、今度はゆっくりゆっくりトレイルとかを舞台にした映画もどんどん撮られているし、そういう感じだと思います。

また実際の巡礼の風景ですが、いろんな人がいらっちゃって、ペットと一緒に行く、みたいな。この人、フランス人の70歳くらいの方ですが、一緒に歩いていますという方もいらっちゃいます。歩いているとスペインなのでガウディの建築があつたりする。ほとんど寄らないですね、巡礼者の方たちは。そんなの見てもしょうがない。黄色い矢印のモホンというここに「残り90km」と書いてある目印が1kmごとにあるのでこれをたどっていても着く。ただ、スペイン人は雑なので、この距離が間違っている。5kmくらい間違っているのかかなり致命的なものもあつたりする、そういうマークとして有名です。

あとはスペイン北部なので、本当に開発から取り残されたいわゆるプレロマネスク。古い建築。1200年くらい前の教会、これはエルナデ教会、これはフロリスタ教会というのがあって、非常にゴシックで大きな教会ばかりと思うんですけど、やっぱり巡礼者の方々は寄らないんですね。信じていないし、こんなもの自分の地元に行けばいくらでもあるわ、という感じで飛ばしていく形になっています。

これがゴールのサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂というスペインゴシックの傑作とっていいようなものだと思います。内部はこういう感じです。

これがヤコブ像というやつで、手が4つ見えると思うんですが、日本ではちょっと考えられないんですが、祭壇の中央部一番高いところに飾ってあるのですが、その後ろ側に回って抱きつけるようになっていそうですね。一応、巡礼が終わったらこれをやる、という風になっている。この10m下くらいのところに、なんでサンティアゴ・デ・コンポステー

ラ大聖堂が聖地なのかといったら、カトリックでは聖遺物という風に言うんですが、カトリックの聖地といえだいたい何があるかという、聖人の死体とかその一部とか、生前着てたとされる衣服とかが置いてある。基本的には全部偽物なんです、ここは一応、ヤコブの遺体があるということになっています。この奥に棺が置いてあって、この中に入っていると。なので、歴史としては中世以来、ヤコブの遺体に祈るために 50 万人の人が歩きましたというんですが、これも全部ウソ。15 世紀、16 世紀くらいになると、いわゆるサンティアゴっていうのは海から 100Km くらい入った、割と海に近い場所にあるが、その辺をイギリス人海賊が荒らすようになる。フランシス・ドリークみたいな人が荒らすようになって、そうするとこのままだと聖ヤコブの遺体もあぶない、この聖遺物を取られてしまうかもしれないということで、1 回隠したんですね、16 世紀くらいに。そうしたらスペイン人の隠し方が雑だったので、どこ行ったか分からなくなった。そのまま 300 年間くらい分からなくなったので、そこで巡礼は一回途絶している。1800 年代終わりくらいになって、時の教皇がさすがになくしたままじゃ困るだろう、探せ！という風に言ったら、祭壇の天井裏から出て来て、良かった良かったと。骨壺が出て来たんですね。ただし、3 つ出て来てしまった。もうどれがどれだか分からないということで、3 つともこの中に入っていて、1/3 ヤコブみたいになって、そのまま。多分、骨壺をどれか取るのは訳がないのですが、そういう形になっています。

徒歩巡礼というのが一番の手段なんです、ほかにも手段があって、自転車巡礼とか言っていて、先ほども別の発表でお話がありましたが、やはり全部を徒歩巡礼者で行くとあぶないので、別の道を走る、国道を走るところも多いという形になっています。二人乗りで行く人も多い。ただ、やっぱりこういうかなり荒れた道も行きますし、日本みたいにどこに行っても自転車屋さんがあるわけじゃないので、自分で修理できなければダメだし、修理道具も自分で積んで走らなければダメなので、パッと見て日本人だと西川先生くらいしかできる人はいないのかなと。かなり難しい巡礼だと思います。ただし、歩くと 900km というのは、大体 4~50 日歩くとかかるんですが、自転車だったら本気出せば 1 週間、もっと速い人だとそれ以下くらいで行ってしまうので、かなり見ている風景が違うと考えていいかと思います。

後は 1 カ月も歩いていけば、5~6 組から 10 組くらい見かけるかなというのはそういう感じで行ったりします。ただし、馬巡礼は割と大変で、歩きか自転車だったらサンティアゴ着いてから自転車でも解体して輪行バッグに詰めて電車か飛行機で帰ることができるんですが、着いて馬を解体して馬刺しにしちゃまずいので、持って帰らなきゃいけない。帰りも同じ距離を歩かなきゃいけないということで、基本的にはスペイン国内、隣のフランスあるいはポルトガルの人がやるというそういうものになっています。

さらにハードコアな巡礼というのが「ロバ巡礼」というのが、これはこの人一点しか行ったことないのですが、ロバ巡礼というのはほとんど意味なくて、ロバ自分自身の荷物が多いのであまり楽にはならない。人はこういう感じで。この人、フランス人だったんです

が、お話を聞いたら 58 歳で、フランス人は働かないので退職してその後、3 年間くらいロバを育てて、ずっと都会のバリでサラリーマンやっていたので、ロバのことなんか知らない。それを育ててロバの習性を勉強し 3 年かけてようやく一緒に旅に出られましたという方もいらっしゃいます。

そのほか、車いす巡礼という方も少数ですがいらっしゃいました。一応、のちほど説明する巡礼証明書というのがあって、徒歩で 100km 以上、自転車で 200km 以上、馬で 100km 以上、動力のついていない車いすで 100km 以上巡礼するとそれがもらえるという風になっていて、かなり大変だと思いますが、こういう形でやっている方もいらっしゃいます。

巡礼手段別の割合を出すと、8 割が歩く。で、自転車がこれくらいで、その後馬とかロバとか車いすというのがほぼごくごく少数の方がいらっしゃいます。

どんどんツーリズムの産業化が進んでいて、荷物を次の宿まで運んでくれる巡礼タクシーみたいなものが出てきたり、ということが見えます。

これがクレシャムと呼ばれる物でパスポートみたいな物です。旅の最初にこれをもって 1 日 2 カ所ずつ押して行く。それを貯めていって、最終的にサンティアゴに行ってこれを見せるとちゃんと歩いてきましたね、という証明になる。巡礼宿、ここがサンティアゴ巡礼の中で一番重要なのですがここで要するに巡礼者同士が一番交流する。それを巡礼者は一番楽しみにしている。そういう場所になっています。すごく安くて、今は多分値段が上がっていると思いますが、これは元修道院の NPO 法人が管理しているそういう場所。

こういうのが道々、いくらでもある。1km の間に 4 つくらい並んでいる場所もあるし、今はもう 10km 歩いてもないということは、ほぼない。ほぼ任意の地点で今日は疲れたから辞めようと思ったらいつでも泊まれるという感じでかなりインフラが整備されていると言えます。これなんかはゲームセンターの地下を改装して巡礼者が増えてきたからここに入れようみたいな場所があって、だから、上にはスペインのヤンキーみたいなのが溜まっていて、下には巡礼者がいるみたいなそういう場所でした。これは僕が行った中で一番質素な場所で、教会が経営しているもので、基本的に料金はお志、なんです。翌朝旅立つときにいくらでもいいので、なんならゼロユーロでもいいので、という感じで、床置き直マットレスみたいなところで寝るという形になります。

ここでも巡礼者同士のコミュニケーションがあつて。早い者勝ちなので、こういう形になります。大体夜ご飯も付いています。ベッドと夜ご飯とワインとパンは無限に出て来ます。いくらでもおかわり自由で、ベッド、シャワー、食事で 10 ユーロとかで 1 泊 1,200 円で泊まれる。家で生活するよりも安く暮らせる場所です。より節約する人は自分で料理したり、そういう場所です。

オスピタレロというのが受け入れる人たちで、この人たちの話がすごく面白くて、巡礼者の宿を経営している人たちなのですが、こういう人たちは自分は絶対に巡礼なんて行かない、なんでこんな馬鹿なこと皆さんやってるんですか？って言うのが基本的には本音である。なので、ホスト・ゲスト間でかなりの温度差があるというのが特徴です。

ラテン語で書いてあってまったく読めないのですが、一応こういうことを書いてあって、熱心な巡礼者がサンティアゴに見事に着きましたねと書いているんですが誰も信じていない。ただし、教会はそんなことないとウソをつく。統計を取っていて、この巡礼証明書を発行するときに、「あなたが巡礼した動機は何ですか？」と聞くんですね。三択になっていて、「宗教的かつ文化的理由」、レリジョン&カルチャーとなっていて、二つ目がスピリチュアルとなっていて、一番下が非宗教的、それ以外となっていて、この割合を見るとカトリック教会は90%の人が何らかの広い宗教的意味で歩いている。なので、巡礼者が歩いているというのはカトリック教会への関心が高まっているんだと言うんですが、このトリックは何かと云ったら、ここで3番目の答えを言っちゃうと、ショボい巡礼証明書しかもらえない。正式な宗教的な人たちの巡礼証明書はこれでそうじゃない人たちには、歓迎証とか間違えて非宗教的と答えちゃうと、「サンティアゴによく来ましたね」という紙なんですね。これは巡礼しなくてももらえる紙なんですね。飛行機で直接サンティアゴに行ってもこの紙は簡単に3ユーロくらい払えばもらえるので、みんな一切信仰心はないのにももちろん、レリジャスですみたいなことをウソついている。そういう統計になっています。

あとは、巡礼の道々で見かけるものとしては、途中で亡くなった巡礼者のモニュメントです。お墓ではないんですが。このあたりでは、徒歩巡礼者が熱中症とかそのあたりで亡くなる場合が多い。特に自転車巡礼は事故ですね。スペイン人は60kmくらいの道を200kmくらいで走ってくるので、それに轢かれて亡くなるという方が多い。そういう方を現地で知り合った仲間とかが後で戻ってきて作るみたいなのがあります。これはちなみに、ピレネー山中で見つけたんですが、日本人ですね。2003年に64歳で日本人巡礼者が亡くなりました。たぶん遭難だと思うんですが、あったりもします。

最終的に到着すると有名な儀式があって、「ボタフメイロ」、世界最大の香炉とか言われて、要するにお香を焚くんですね。中世の頃は、早い話、到着した巡礼者は臭くてしょうがないので、最初にこれを振っておかないとその後のミサができないと言うことでやっていたが、今の巡礼者はゴアテックスでみんなきれいな感じなので、まったく必要ないので、今はミサの最後にやって、そもそもぜんぜん宗教的な意味がない儀礼だったのですが、これがメインイベントみたいになっている。ここからここまで、170cmくらい口径があって、たしか300kgくらいある世界最大の香炉と呼ばれています。本気で振るんですね。高さが30mくらいまで上がって行く。これが上がって行って、下で写真を撮る。二回だけ過去に結び目がほどけてこれが飛んでいったらしいです。2回とも壁に突き刺さって一人も死人が出なかったということです。

ここから少し、巡礼者の体験とか経験というのに、公開されている出版物から巡礼疾患を少しだけご紹介しておくと、全部日本人巡礼者なんですが、ある人は、子どものとき、時間はたっぷりあった、うんぬん言って、サンティアゴの非現実的な世界を思い出すと日々の暮らしの悩みなどどうでもよくなってきます。これは典型的な語りだと思います。

また別の語りとして、ホスト-ゲストの交流は一体どういう風に行われているのかという

ので、巡礼宿の有名なホストというのが2人いるので、それをご紹介します。まず一人目がクレープ婆さんと呼ばれる人で、これも日本人のまた別の巡礼者が書いていますが、オ・セブレイロという難所があるのですが、そこを降りた後、この彼女に僕も実際会いましたが、本当に廃墟みたいところから地元のおばあさんが出て来て、お皿に5cmは重ねてあるクレープをいきなり出して、「どうぞ」という。この日本人女性巡礼者の方は、ブラジル人、韓国人の方々と一緒にクレープを手にした。そうしたら塩を振ってくれて、食べたとたん突然50セント支払えと手を出してきた。このことに関して日本人巡礼者の方はこれは押し売りである、と。まあ50セントなら労いかと思ってお渡ししたら全部で20枚くらいあるから10ユーロ。1,500円の稼ぎ。いい商売だな。でも、ほほどのお金で余生を楽しんで欲しいなと、思ったということで、これを一個の事例としてご紹介したいと思います。これは否定的な形で紹介されるホストの方です。

もう一人の方は、サン・ファン・デ・オルテガという街があるのですが、そのホセ神父、この人が巡礼者にニンニクスープを振る舞うということで知られている人です。これはクレープ婆さんのことを書いた人と同じ人の巡礼手記なんですけど、彼女は彼に対しては非常に肯定的でニンニクスープをどんどん作ってホーローのカップに注いでくれた。ひとり一人に握手をしてくれた。ホセ神父さんいつまでもお元気でいらっしゃってください。ただし、注意書きがあって、「ちなみにこのスープはミサに出席しないといただけないので、必ずミサには出席してくださいね」ということをこの日本人巡礼者の方は書いている。

たぶん、ご存じない方もいらっしゃると思いますが、カトリックのミサというのは出たら必ず途中で最後に献金の箱というのが回ってくる。一応、みんな空気を読みながら入っていくんですが、最低2ユーロ。多い人だと5ユーロ、10ユーロ紙幣くらいを入れていくという感じになっていて、要するにクレープ婆さんは50セント、70円くらいでこんなひどい詐欺だとか押し売りだと言われている。逆にこのホセ神父はより金を取っているんですけど、すごくいい人だと言われている。じゃあ、この人、ホセ神父に関して別の人が書いていて、さっきのシャーリー・マクレーンですね。そのとき、彼女、私はホセ神父のいるまちに着いた。当時、彼女はものすごい世界的女優だったので、ずっと彼女の巡礼にはパパラッチが着いていた。非常に迷惑だった。本当にシャワーを浴びているところをいきなりカーテン開けられて写真を撮られたみたいな被害に遭っていた。

そうして、ホセ神父の教会に着いたら200人以上の記者が私を待っていた。カルロスというマクレーンと一緒に巡礼をしていた人が先に話を聞いていたら、この教会、要するにホセ神父がここでマクレーンの記者会見を開いてやるから教会に寄付をするようにとって200人集まっていた。マクレーンは「私は彼にそれはフェアではないと伝えて欲しい。ホセ神父も含めて全員出て行って欲しい」と。で、ホセ神父はマクレーンにニンニク入りのスープを差し出したが、「私はそれを断り旅を続けた」という手記が残っている。別に私は、本当はクレープ婆さんがいい人で、ホセ神父が実は悪い人ですと言いたいつもりではないのですが、多分、ポイントとしては要するにサンティアゴの歩いている人たちは、そ

ここで体験したい体験があらかじめ決まっている。要するに、地元の素朴なおばあさんが巡礼に施しをしてくれる、それはやはり無料でなきゃいけないし、お節介ありがとうみたいな経験を求めている。そこのなんかある種、ホストもゲストも演技してくれる。ホセ神父は肯定的にやってくれる。逆にクレープ婆さんはもっと上手で見抜いているわけなんですね。この巡礼者によって、私がこの農村、寒村の素朴なおばあさんだと思っているから、絶対にこいつは私のクレープを取る。取ったら料金を請求しちゃえ。ある種、ゲストの眼差しみたいなのを先回りしてやっているからすごく叩かれるのだろう。そういう気がします。その他最初の一と一緒なんです、巡礼者の語りはだいたいこんなこと言ってるんですね。就活中の大学生みたいなこと言い出して、本来の自分とは、自己実現とはと訳の分からないこと言ってる、これは全部先ほど紹介した事前の映画とか本とかに書いてあったことの体験をもう一回体験しに行くという形になっていると思います。

簡単にまとめておきますと、この非現実的な世界とか書いていましたが、恐らく本当の非現実的には経済格差ですね。スペイン北部の経済の実態というのがサンティアゴ巡礼にある種、下部構造として支えていることと思います。

二つ目は先ほど言ったので、感動しにみんな行ってるんですね。なんせ、信仰心がないから感動くらいしかすることがない。そういうものを台無しにしてしまう人というのが叩かれている。なので、ホスト-ゲストである種共犯的に感動の機会を造り上げていくことがサンティアゴ巡礼の規範みたいになっているという言い方もできます。

一方でゲスト-ゲスト同士のつながりというのもサンティアゴ巡礼ではすごく重視されていて、さきほど、あった、ここが正しい道ですよと石を積んだり、亡くなった巡礼者のモニュメントって、やっぱりみんな石を置いていくんですね。同じ道を歩いたということの仲間意識というのが同時代だけじゃなくて、過去とか未来も含めてつながっている、つながりの感覚があるというのがサンティアゴ巡礼者の特徴かなと思います。

なので、サンティアゴ巡礼の語りで一番多いのは、到着遅延ですね。要するに、着きたくない、着きたくないということをずっと言う。ゲスト同士でずっとコミュニケーションを取っていたいので、最後、ゴールにはできるだけ着きたくないということを言っている。じゃあ、その巡礼者、聖ヤコブを誰だか知らない人がほとんどです。この巡礼者という肩書きはどのように機能しているかと言ったら、たぶん、こういうゲスト同士のコミュニケーションというものをなめらかにするために機能している、そういう風に思います。

ここからちょっと話が変わって、熱心な信仰を持っていて、バスでサンティアゴに巡礼する人はどういう風に考えているのか。その辺をご紹介して終わりたいと思います。

私が同行調査をさせていただいたのは、大阪にあるカトリックの方がやっている、ほぼ家族経営なんです、カトリック巡礼専門の旅行会社をやっている、ここが私が行ったのとほぼ同じスケジュールなんです、ルルド、ファティマ、サンティアゴって、前二つは有名な聖母出現の地なんです、そこを10日間で回るというツアーを毎年必ずやっています。10日間38万5,000円。参加しているのは全員カトリックの信徒さん。要するに大

阪を中心にいくつかのカトリック教会にこのパンフレットを置いて、そこで人が絞られてやってくる。かなり強行なんですけど、南仏のトゥールーズというところからリスボン、これ全部バスで行きます。このうちのサンティアゴ巡礼の部分というのがここになっていて、ルルドというフランス最大の聖地に行った後にこういう感じで行く。まず歩く人は絶対に行かない、日本にキリスト教を伝えたザビエルの実家とかが結構離れているんですが、そういうところに寄りながら行ったりする。宗教的とかきわめて儀礼的で、例えば空港で飛行機に乗る前に、これはスペイン人の神父さん。同行して、普段は大阪の教会に勤めている方ですが、飛行機に乗る前に「皆さんで飛行機に祈りましょう」とかバスに乗る前もロザリオという祈り方を練習したり。

で、彼らはバスで徒歩巡礼者の何百倍というスピードで移動していくんですがその過程で彼らが何をやっているかといったら、徒歩巡礼をつまみ食いする、追体験するということです。彼らは町によると歩き巡礼者が泊まっている宿に興味を示すんですね。中に入って写真を撮ったり、車窓から見えた徒歩巡礼者の写真を撮るとか、さっきのロバをさわらせてもらう、馬巡礼者と一緒に写真を撮る、あるいは教会に歩き巡礼者の人がいたら、一緒に揃って写真を撮ってもらう。こういうことをずっと繰り返している。面白いのは、本当に信仰を持っていて、そもそも巡礼とは何かと言ったら、聖ヤコブの遺体を拝みに行くことが大事なわけで、プロセスなんてどうでもよかったはず。飛行機で直接着けばいいのですが、にもかかわらず歩いている、まったく信じてなくて歩いている人たちがいるんですが、信仰を持っているバス巡礼者の方々は、彼らこそが本物だと必ず口々に言うんですね。「私たちみたいにバスで行くようなものじゃ本当はダメで、あれをやらないとわからないんでしょね」みたいなことをおっしゃる。さらに、歩いている信仰のない人たちがなんていうかと言ったら、「あんなバス巡礼なんて偽物だ」みたいなことを聖ヤコブが誰かもしらない人が語る。やっぱりサンティアゴの道ってのは歩かないと分からないよねって、そういう本来一番大事であるゴールというのが、行程化してこのプロセスの間をできるだけ延ばして、到着を遅延して延ばして、なぜ延ばすかと言ったら、そこでできるだけコミュニケーションをたくさん取っていくというそういうスタイルがかなり傾向としてはつきり現れていると言っていると思います。

最後、四国遍路はサンティアゴをモデルにして世界遺産化しようということになっているんですが、やっぱりポスターとかも一番前の正面に歩き遍路というのを中心に。ただし、なんで歩き遍路かと言ったら、まず世界遺産に四国遍路を登録しようとしたときに、文化財が残っていない。何にもというと極端ですが。やっぱり熊野なんかと比べたらはるかにものが残っていないから、モノによる普遍的な価値の証明というのが不可能。それがこの議事録とかからもはっきりしていて、四国遍路の有形的資産だけではこの普遍的価値は証明できない。そうするとどうしようか。近世から現世まで歩きが基本である。これを遺産登録の核にしようという話になった。遍路者は四国遍路遺産の中核的価値の形成者であり、四国という島を歩くという身体的行為あるいは身体的指導、身体的指標である本来安らぎ

である云々、かんぬんが大事なんです。という話があるのですが、これは全然どうなるかわかりませんが。

ただし歴史的にみてもまず、四国遍路の実態というのを調べてみると八十八カ所はいつからなかったかの全然分からない。せいぜいが江戸時代くらいにどうやら言われた。今、四国遍路の人が着ている服装もこれなんかは戦後になってからできたもの。戦前の時点ではみんなバラバラでやっていたし、あまり歴史的なモノとは言えない。さらに、歩いている人がいるのかと言ったら、年間 10 万人。これは自動車とかも含めた人が恐らく 10 万人程度と言われていて歩いている人はそのうち 1,000 人～2,000 人くらいじゃないか、90%位の人は車かバスでしょうということになっています。面白いのが、バスで行く人ほど車で行く人ほど、非常にフル装備をしているんですね。先ほどの宗教的な。当たり前なんですけど、歩いている人はあんなのを着ていたら暑くて歩けないので、もっとトレッキングの服装をしていて、そこでも妙な入れ違いみたいなのがあつて、なので、四国遍路は完全なツーリズム産業です。ワンランク上の遍路旅みたいな感じすごく偉いお坊さんが一緒に行きますよというのだったり、バスが着いたら必ず記念撮影をすると。歩きの人たちはこの白い服くらいは着ていますが、あとはやっぱりトレッキングの基本的な格好をしていると。若い人ほど、こういう格好をしてあるいは海外の方もこういう格好の方がいますが、でもいずれにせよ、サンティアゴとは一部重なる形で、どっちもそうですが、信仰心のある高齢者はバスで行く。信仰心のない若者は歩いて行く。ただし、前者は後者をみて「私たちは偽物で、申し訳ありません」と言っていて、後者は前者をみて「あいつら全然ダメだ、分かってねえ」みたいなことを言っていて、巡礼の動機と手段が逆転していて、あえて言えば後者が本物の観光客で前者が偽物の巡礼者みたいになっている。この辺のねじれ構造というのも現代の IT 系の巡礼路の特徴かなと理解しています。

ご静聴ありがとうございました。

<<質疑応答>>

岡田真弓

お話ありがとうございます。岡本先生の話聞いていて、非常に話に夢中になりコメントがまとまりきっていないのですが、すぐに思いついたのは、私が初めて発掘調査に行ったのがイスラエルという国で、イスラエルは国自体がホーリーランドと呼ばれているくらい聖地が集まっているという場所です。私も発掘調査に行くときに本当に多くの巡礼者の方々を見かけました。ご指摘の通り、やはり二つ型があつて、信仰心がありそうで平均年齢が高めな人は基本的にバス移動。比較的若年層で、グループではない個人の巡礼者は歩きが多かったように思い出してきました。

聖地が集まっているイスラエルで歩きを重視した聖地巡礼ってどんなものがあるのかなと考えてみると、二つほど思い出しました。一つが、多くのキリスト教の巡礼者というの

は、空港からバスで、イスラエルは四国くらいの大きさなんですけど、有名な遺跡巡りをしながら最後にエルサレム市内に入る。そして、とくに聖地が集中する旧市街では、バスを降りてイエスが十字架にかけられる前に歩んだヴィア・ドロローサという道をおもに徒歩で進む。ただちょっとサンティアゴの場合とは違うのですが、彼らは木で造った十字架を背負って 10 人か 15 人くらいの団体で進んでいくんですけども、例えば、イエスが十字架の重みに耐えられず膝をついたところとか、壁に手をついたところといったスポットで停まる度に、聖書の該当する箇所を読んだりする。つまり、イエスの追体験をしていながら巡礼路を進み、最終的にイエスが埋葬されたといわれる聖墳墓教会に入ります。サンティアゴの場合だと、聖人、宗教者の想いを追体験していきようなイベントがあるのか、というのが一つ目の質問です。

もう一つが歩くことを主体とした巡礼で、キリスト教ではなく、ユダヤ教の方なんですけど、ユダヤ教と言ってもちょっと定義が難しいのですが、どちらかというとユダヤ民族を意識した巡礼の話です。1920 年代にヨーロッパで反ユダヤ主義が唱えられたときに、これはもう自分の民族の国家を作らないといけないということで、徐々にパレスチナに興味を抱くユダヤ人の若者が増えてきて、彼らが少数のグループを作って「イエディアット・ハアレツ」という、日本語で言うと祖国勉強ツアーみたいなのをするようになりました。パレスチナの地を、聖書をたずさえて歩く。その目的はユダヤ教に関する遺跡や聖書に書かれている景観を見て歩くことで、ユダヤ民族の共通性みたいなことを発見しながら民族的な意識を強めていくという作用があったようです。今、それがイスラエル軍にも受け継がれていて、イスラエル軍の演習のひとつに、イスラエル中を歩いて境界線の確認、祖国の形、姿を学ぶという活動があります。サンティアゴの巡礼者の場合、巡礼者にとって歩く巡礼という行為が、ソーシャルネットワークの構築の場みたいな役割もしているのかなと思いました。長い間同じ景観をずっと一緒に見てきた人たちの中に、一種の共通の感情とかアイデンティティとまでは言わないけど、そういうものが醸成されて、例えばそれがリピーターにつながるとか、あるいは帰った後も何らかのつながりを形成しているのかどうか、というのが質問の二点目です。

岡本亮輔

はい、ご質問ありがとうございました。

まず、追体験というところなんですけど、聖ヤコブという聖人の一人なので特に彼にまつわるエピソードとかがやはりイエスというのが一番中心で重要なので、それほどない。ただ、一応、そのアルベルベ、宿があつてまちまちに必ず教会があつて、その教会では夜、8 時とか 9 時くらいに巡礼者のためのミサというのがどこのまちも大抵やっている。ただ、ほとんどの巡礼者がそれに行かない。眠いし、だるいし、酒を飲んで酔っ払っているし、そんなもの行ってる場合じゃないって。その辺は完全に「そうかあ」と言ってしまうていい。

もう一つ、何かサンティアゴ巡礼者特有のある種、「歩いた人にしか分からないよね」という語りは非常に強く出てくる。日本も含めて各国にサンティアゴ友の会っていう同好組織があって、日本の場合だったら月に1回くらいこういうパワポ使いながらこういう経験しましたと話す。一方で聖ヤコブという人がかつてのヨーロッパでどうやって表象されていたかという、彼はサンティアゴ・マタ・モロスといって、ムーア人殺しの聖ヤコブと言っていて、要するにレコンキスタ、国土回復運動のときにキリスト側が押されている時に突然、キリスト側に白馬の騎士が現れて、イスラム教徒を皆殺しにして勝利に導いてくれたという伝説がある。今のイスラムフォビアと重なる可能性があるといえはあるが、それほどやっぱりローカルな部分が出にくいという巡礼になっているので、その辺が非常に違っていて面白いと思いました。ありがとうございました。

関雄二

関です。私は20年前、サンティアゴ・デ・コンポステーラを歩きましたので、懐かしく見ていました。その後、銀の道も全部歩いて、なぜ歩いたのかなって今、思いながら聞いていて、ずいぶん、今では、変わったんですね。当時、私はスペインのカンタブリア大学との共同プロジェクトを3年間やっていたので、一気に歩いたのではなくて毎年少しずつ歩きながら足して行って、全部行った。何に影響されて歩いたのかなと思っていたんですけど、パウロ・コエリョとかシャーリー・マクレーンとかいろいろな人がサンティアゴの道のことを書いていますが、私自身はケン・フォレットの「大聖堂」に影響されましたね。あれも大ベストセラーになっていましたけれど、自分もそのイメージの形成に荷担していたんだなと思ひ返しました。

それで、今日のコメントですが、非常に難しいですね。かなり完璧に宗教社会の関係性をまとめられていると思いました。特に大きな疑問等はないんですが、ひとつコメントさせていただきます。今日、お集まりの皆さんの専門の方たちは、昔からおっしゃっているけど、観光というものは、ある種の確認作業だと思います。それは旅に関する記憶、イメージの確認作業であって、聖地巡礼もそうでしょう。2年前に研究会で取り上げたアニメの観光もそうでしょう。アニメというもののイメージを確認していました。その意味では、サンティアゴの巡礼もこの枠組みの中に入ってしまうのかなと思いました。かつてなら、観光の雑誌があり、テレビでもってイメージがつくれ、それを確認していくことが普通でした。しかしイメージにのっとった形で行われる観光の中で、今日うかがった一連の話ではどこが違うのかなと考えてみました。じつは先ほどのフットパスもそうですが、歩くことのイメージ、これが改めて出て来た、強調された、という点ではないかと思います。たしかに昔から観光ではものすごく歩いていたと思います。しかし、どこかに行くための手段として歩くのではなく、むしろ歩くということが前面に出てくるという点が違うと思いました。それからもう一つ、午前中の発表を聞いていて思ったのが、いわゆるボトムアップですね。人々がむしろイメージを造り上げていくような作業の場として歩くことがあ

る点も重要です。つまり名もない道、名もない散歩道をすばらしいと言って、皆さん方が奨励し、協会を作り、そこを全国に広げ、ネットワークを作りどんどんイメージを作っていく。もともと何もないところに皆さん方が自由に参加しながら作りあげていく。一方においてはぜんぜん違うサンティアゴ型のようにどちらかというと旧来型のイメージ形成の中で観光の再確認が行われている。同じ歩くという観光でも、大きなコントラストを今日感じました。

一方において、その先何があるかなとも思いました。と言うのは、この両者の関係が互いに影響しているかどうかですね。歩くにしても古典的な旅が新しい脈絡においてコピーされているか、されていないか。フットパスの旅が、巡礼の旅をモデルとしているのか、あるいは巡礼自体が、フットパスのような旅に逆に影響され、変容しているのか。検証するのはすごく難しいですけど、この関係が私はすごく興味があります。

もう一つは、細かい質問ですが、亡くなった方の十字架、私は歩いているときぜんぜん気がつかなかったのですが、あれはいつくらいから行われているんですかね？ あれは、いわゆる私から見ると歴史性が担保されている場所に自分を位置づけるという作業があるように思います。一市民であるならば普通は大きな歴史の中に位置づけられないけれど、ああいうところに自分の名を刻むことによって、大きな歴史の中に位置づけられ、その喜びを感じることができるのではないのでしょうか。そういう行動として十字架を据えるのならば、それはいつくらいのことでしょうか、近代の発想なののでしょうか？ もしかかなり過去にさかのぼれるならば、それはもっと宗教的な意味かもしれませんね。現代とどう違っているのか、いつくらいからああいうのができているのか、ちょっと興味を持ちました。

岡本亮輔

ありがとうございました。あのモニュメントに関しては、まったく古くないんですね。私が調査していた 2007、8 年頃に聞いたことがあるんですが、たぶんまだその時点で 10 年経つか経たないくらいだろうと。その時点でもやっぱり一区間、毎日 20km くらい歩いているとその区間で、3 つ 4 つは見かけるという形でした。恐らく、私が行ってるときは年間 15 万人くらいで、今、30 万人ですので、数も圧倒的に増えていると思う。場所によってはたぶんピレネー山中を下りたローゼス・バリウスのあのへんの出たあたりにはもっとたくさんあるという話をお伺いしているので、現代の復興したサンティアゴ巡礼の中で新しく出て来た文化だと言っていいかなと思います。

関雄二

そうすると、あれは観光地における落書きとどう違うんですか？

岡本亮輔

まったく一緒だと思います。

道尾淳子

北海道科学大の道尾と申します。昨日から初めて参加させていただいております。私が今関心を持っていることに移し巡礼（または写し巡礼）がありまして、今、ご紹介いただいているような巡礼路を長い距離完歩するというのとは違う発想で、例えば札幌でも藻岩山には三十三観音、円山にも八十八カ所の写し巡礼があります。今は自然歩道なので北海道や札幌市が管理されているんですが、確かに市民が行き交う、よく使われている利用路なんですね。その辺にお考えとか思うところがあったらお聞かせ願いたいのですが。市民の住むところに隣接されて、宗教行為が今は純粹にはなされなくても開墾された動機としては巡礼路という、そういうものが現にあるということについてお考えがあれば。

岡本亮輔

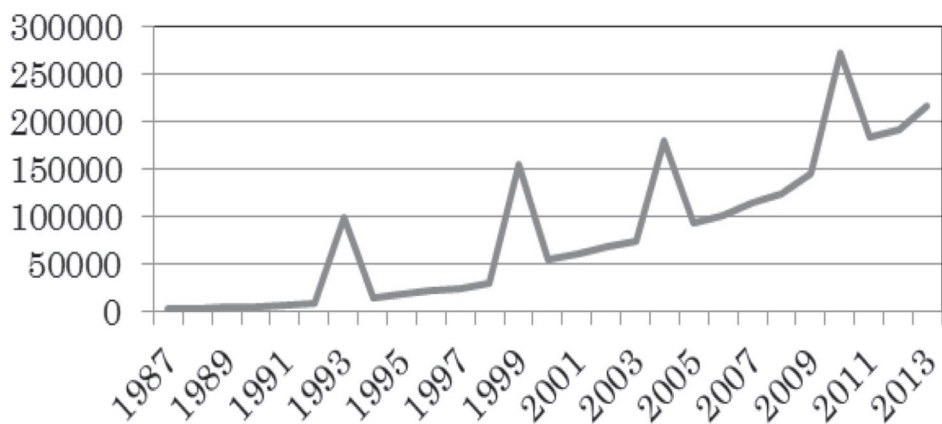
はい、なかなか難しいですが、移しの場合は近代以降に四国から始まって最初はデパートとか出開帳とかいって、四国八十八カ所のお寺にあるそれぞれのお寺の砂をひとつのデパートに集めて、南海電車に乗ってそのデパートに行って、みんなでそこを回りましょうみたいな商業イベントとして行われていた。たぶん、それを移すということは、ある意味、信仰心あるなしで言えば、そうとうある人のタイプの話。どうしても行きたいけど遠くて行けないから持って来ている、という。そういう意味では冒頭に申し上げました、世俗観みたいなのは逆の方向性。逆に非常に宗教的な人にしかその価値ってというのが伝わりにくくなっているのかなと理解しています。

道尾淳子

札幌の三十三観音の場合はそれを設置しているお寺の方ともよく話をするんですが、1番と33番は境内の近い距離に置いてあると。距離がどんどん短くなることに信仰心が色濃く表れている、おもしろい現象だなということに改めて気づかされました。ありがとうございました。



年間巡礼者数の推移（1987年～2013年）
（サンティアゴ巡礼事務所の資料を元に筆者作成）





巡礼動機

- 宗教的かつ文化的：約50%
- 宗教的：40%弱
- 非宗教的：10%未満

逆転する真正性

〔 信仰心のある高齢者はバス
〔 信仰心のない若者は歩き

→ 巡礼の動機と手段の逆転

➤ 本物の観光客と偽物の巡礼者